



子育てチャンネル

だれでもよかった

(ある事件を通して考える)

また痛々しい事件が起きました。新聞やテレビに出てくる刺激的な見出しや目を背けたくなるような場面。

「4人が失血死、全員一突き。3人がトラックで死亡。日曜の歩行者天国が地獄絵に変わった。秋葉原の事件の容疑者は25歳。『人を殺すために来た。だれでもよかった』」

3月の茨城の通り魔は24歳が容疑者。『早く捕まえてもらん』と110番で挑発した。やはり『だれでもよかった』と8人を殺傷した。

1月の品川の通り魔は16歳が容疑者。『おれを侮辱するんじゃねえ』と叫んで5人に切りつけた。

先日『児童に指差された』と車をバックさせ、登校の列に突っ込んだ事件もあった。6月10日付け北海道新聞「卓上四季」より抜粋。なぜこつとも人命を軽んじる

事件が起きるのでしよう。

次に、事件が起きると必ず報道されるのが「なぜ起きたのか」「原因は何か」。続いて容疑者や犯人の生まれ育った家庭や子供時代、近所の人々のお話が、これでもか、まだあるよ、とばかりに報道されます。

さらに容疑者や犯人の取り調べの様子や発言内容が詳細に発表されるのです。

「人生負けっぱなし」「みんな裏切る」「リストラに不満」「恋人がほしかった」「誰かに止めてほしかった」「申し訳なかった」などなど。

人間は時として、何か行動を起こす場合、あるいは何か発言する時など、理由として

「社会がこうだから」「会社にこうされたから」「上司にいじめられたから」「相手に断られたから」「友だちに悪口を言われたから」など、自

分以外に理由を押し付けがちなものです。あるいは言い逃れをするものです。

しかしそれでいいものなのでしょうか。自分自身の責任とか考えの浅はかさ、能力の足りなさ、経験不足、見通しの甘さなどについてはどうでしょうか。思いを致さなくていいのでしょうか。

おそらくは一時の感情の高ぶりや衝動で罪を犯しても、時が経ち、冷静になって考えるといろいろの思いが湧いてくるのではないかと思います。時すでに遅し、ではありませんが「しなきゃよかった」「やらなければよかった」と思う前に「なぜ自分を止めることができなかったのか」と考えていくと、やはりその人の子供のころの育ち方、育てられ方に行き着くのではないのでしょうか。

容疑者や犯罪者の多くは「普通の子だった」「いい子でした」「素直な子でした」と異口同音に言われます。家庭の中で、親の気に入る子、いい子を演じるのは、中学生

くらいまではよいでしょうが、それ以降はなかなかうまくいかないようです。

そこを暴発させずに、しかも失敗をつまぐ乗り越えられるには、幼少期の心の育ち方、心の持ち方にあると思うのです。

一つには、我慢の心、二つ目は反省の心、三つ目は思いやりの心です。

小さい時から不自由なく育ち、思い通りに生活していくと、どうなるでしょう。

一度も振り返ることなく善悪の判断なしに生活していたとしたらどうでしょう。

相手の気持ちや立場を考えずに、自己の思い通りにしてきたとしたら、どんな人間になるでしょう。

わたしたちは、子供たちに大人として信念を持って幼少期の心のありようをしっかりと教えなければならぬのではないかと、思うのですが…。

東川町地域子供会育成連絡協議会

会長 三原 真琴